

聖マリア国際協力ニュース

第 95 号

平成 20 年 7 月 1 日 発行

ベトナム国カウンターパート研修のご報告

さる5月26日から28日までの3日間、ベトナム国「ホアビン省保健医療サービス強化プロジェクト」のカウンターパート研修の一環として、当院において研修を実施しました。

このプロジェクトは、限られた人材・予算・機材等のリソースを最大限に活用しつつ、保健局・省病院・郡病院間の連携の強化や人材育成のための研修活動を実行することで地域医療サービスの改善を目指しています。今回の研修では、保健局・省病院・郡病院からの6名のカウンターパート(技術移転の対象となる相手国行政官や医療従事者)が日本の地域保健医療の現場を題材に学び、省全体の医療サービス向上のための実現可能な改善策を提示できるようになることを目的としています。

当院における研修では、研修受入元である国立国際医療センターからの要望に沿って、「予算管理」、「資料管理」、「PFFCへの取り組み」、「救急部における症例検討会の実際」等の研修プログラムを実施しました。研修員の皆さんは熱意に溢れ、その真摯な態度で研修に臨む姿がとても印象に残りました。

「予算作成」の講義および「資料管理」の現場見学では、医療資源の効率的な活用についての事例を紹介しました。「PFFC」の講義および業務改善事例の見学では、研修員から「患者サービス向上のための改善

国際協力部 矢山進一



救急部症例検討会で発言する研修員

策を考えるうえで重要なヒントになった」との感想が述べられました。また「救急部症例検討会」にオブザーバー参加された際には、「内容のレベルの高さに驚いた」、「本当に有意義な経験だった」との発言があり、今後の人材育成のみならず、情報共有に基づく組織間連携の強化を検討するうえでも大いに参考になったようです。

3日間の研修を終え、研修員を代表して郡病院の院長であるトアンさんより、「短い時間でしたが、たいへん貴重な研修でした。ここで学んだことを持ち帰って、今後の病院運営に活かしたいと思えます。」との挨拶があり、また国立国際医療センターの後藤コースリーダーからも「おかげでニーズに合った質の高い研修を受けることができました。ご協力いただいた講師・関係部署の皆様にもよろしくお伝え下さい」と御礼の言葉を戴きました。当院で学ばれたことの成果が、ホアビン省における地域医療サービスの向上として実を結ぶことを願ってやみません。

中国西部大地震での国際緊急援助隊医療チームの活動について

国際協力部 山崎裕章

日本時間5月12日午後3時28分、中国四川省の阿坝チベット族チベット族自治州において、マグニチュード7.8(中国では震度表示はない)の地震が発生しました。地震発生から1週間後の5月19日に日本政府は、中国政府の要請に基づき、国際協力機構緊急援助隊事務局を通じ、国際緊急援助隊医療チーム(JMTDR)23名(うち医療チーム登録医療従事者16名、以下隊員)を20日に派遣しました。活動場所は、先発派遣されていた国際緊急援助隊救助チームが活動した北川県や青川県の被災地でなく、中国政府から「成都市内の第一人民病院あるいは四川大学華西病院を」との要請がありました。中国政府からの説明では「被災地には日本側の助けを必要とする患者はもうおらず、重篤な患者はすでに成都市など比較的規模の大きい都市に移送された」とありました。この要請を受け

JMTDRは両病院の視察を行い、四川大学華西病院で活動することを決定し、22日から活動を開始しました。

病院支援になったことから我々の活動は、隊員の専門性を生かしたところで行うことになり、救急外来、ICU、透析室、小児科・産科、薬局、放射線室に分かれ行われました。私(臨床検査技師)の場合は、救急外来の汚染区(傷が感染していると疑われる患者が運ばれる場所)で細菌検査(染色と培養)を行うための検体採取を行いました。検体採取はそれほど多くなかった事から、JMTDR医療調整員として患者の搬送支援、JMTDR医師・看護師が行う診察・治療への支援、患者統計、活動の記録等も行いました。また救急外来の処置室にも入り、被災者患者と通訳を介し会話し、「心のケア」とはいかないまでも、積極的に声をかけることも行いました。

活動期間中、隊員の患者への献身的な姿勢に、患者やその家族から「感謝(ありがとう)」と、そして病院スタッフからは感銘を受けたとの言葉を頂きました。さらに、JMTDRの本部および待機・休憩テント(写真)には、扇風機、花束、パンダのぬいぐるみ、寄せ書き等を頂き、日本から来てくれた事に「感謝」の声を掛けてくれました。

今回の活動を通じ、私は、自分が抱っていた中国に対するイメージが180度変わりました。今後の復興に何か支援出来ればと考えています。最後にこの場をお借りし、犠牲と被害を受けられた多くの方々に御悔やみとお見舞いを申し上げ、ご支援を頂きました聖マリアグループの皆様方にお礼を申し上げます。

ミャンマーサイクロン被災地での緊急医療援助隊活動への参加

国際協力部 浦部大策

5月はじめにミャンマーのイラワジデルタを襲った大型のサイクロンNargisによる被災地に、JICA(国際協力機構)が緊急医療援助隊を派遣しました。私もその一員として被災の中心地で約10日間活動する機会を得ました。発災から既に4週間が過ぎての現地派遣で、一般にイメージされる緊急災害医療の様相とは少し異なりますが、貴重な経験を積む事ができました。援助隊事務局によれば、急性期を過ぎた段階での派遣であるため、隊のメンバーは公衆衛生、感染症、小児科、皮膚科、などを専門とする陣容で構成したとの事でした。私は初めての緊急援助隊としての派遣であり、ワクワクドキドキで出発しました。

我々の活動地は被災地域の中心都市であるラプタという町。昔の首都ヤンゴン(今の首都はネピドー)から距離にして約300キロの距離ですが、道路事情が悪く、バスで13時間かけて移動しました。ヤンゴンの町を出てからラプタまで、緑の平原が延々と続いていました。ラプタでは、避難民キャンプの一つである3マイルキャンプにテント診療所を開設。このキャンプは飲料水、テント、食料、医療など国際社会からの援助物資が配給されていて、人々が困窮した様子はありません。日本のニュースなどから想像していた軍事政権の厳しい統制や監視なども感じませんでした。周辺のキャンプも大きな差は無く、日本隊が入るキャンプだから整備の進んだキャンプを紹介した、というわけでもありません。

キャンプの住民達は親日的で、皆我々のことを好意的に受け入れてくれていたのを感じました。

ミャンマーは雨季に入り、連日激しいスコール。合間の日差しも強烈で、住民達のテント生活の厳しさが実感されました。我々のテント診療所には毎日多数の患者が押し寄せました。時



脱水症の患者に点滴を施す

期的に災害による外傷患者は少なく、感染症の患者が多かったのですが、発熱患者には特別に注意を払いながら診療を行いました。感染症としては予想された

とおりマラリア患者(熱帯熱マラリア)が多く、他にロタウイルスによる脱水、インフルエンザ、デング熱など種々の発熱疾患が混在、結核を疑わせる患者も多数いました。子どもも発熱、下痢などを主訴に多数来院しましたが、基礎に高度の栄養不良を呈している児も多く、急性疾患としては別の、慢性的な健康の問題が存在している事を感じました。尚、この地域での死因の一位は蛇咬傷だそうです。コブラやガラガラ蛇など多数の毒蛇が生息しているようで、草むらでの用足しはドキドキでした。

受診者の中で圧倒的に多かったのは被災後の精神的ストレスに悩まされている人たちです。患者の多くが被災した時の恐怖に今も悩まされていて、身体的な治療ではなく精神的なサポートの必要性を痛感しました。家族や親しい人が目の前で災害に飲み込まれていくのを経験した訳ですから、精神的な傷が大きいのは当然でしょうが、災害の最中の出来事は話を聞いているだけでも辛いものがあります。

災害後の感染症の大流行もなく、災害後の医療支援のニーズは少ない、との判断から、援助隊の活動は我々一次隊の派遣のみで終わりました。しかし、避難民にはまだ様々な医療支援が必要だと感じます。今回、災害地での医療という特殊な医療活動への参加を通して、短時間ながら貴重な事を経験し、深く考えさせられました。ミャンマーの被災者が早く元の生活と活気を取り戻される事を切に願っております。

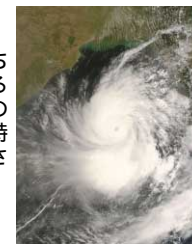


外待合の患者たち

帰国報告会のご案内

国際緊急援助隊・医療チームの一員として、ミャンマーおよび中華人民共和国に各々派遣されていた国際協力部の浦部大策部長と山崎裕章さんの帰国報告会が、7月8日(火)午後6時より第7診療部5階の保健指導室にて開催されます。

国際協力活動に関心をお持ちの方、また今号に掲載している各医療チームの活動についての記事をお読みになり興味をお持ちになった方はぜひお越し下さい。【国際協力部】



今月の動き

【受入】

- ・7月14日(月)～7月16日(水) 韓国カトリック大学看護大学学生の病院実習受入
- ・7月22日(火)～7月24日(水) 釜山カトリック大学大学院生の病院実習受入

お知らせ

- 前号に掲載しておりました韓国忠南大学校研修生の新生児センター研修については、下記のように日程が変更になりました。
- ・6月30日(月)～7月11日(金) 医師研修(1名)
- ・6月30日(月)～7月4日(金) 看護師研修(2名)

